



かほく防災記者リポート



石巻・震災遺構大川小を視察

大切な人を思い行動を



震災前の学校生活や震災時の出来事などを説明した佐藤さん

東日本大震災の教訓や災害への備えを学び、発信するかほく防災記者の中学・高校生5人が11月9日、大学生らを対象に河北新報社などが開く通年講座「311『伝える／備える』次世代塾」の被災地視察に参加した。宮城県石巻市の震災遺構大川小を訪れ、同小6年だった次女みずほさん＝当時(12)＝を津波で亡くした大川伝承の会共同代表の佐藤敏郎さん(61)の話聞いた。

大川小では震災で高さ8.6メートルの津波が押し寄せ、児童74人、教職員10人が犠牲になった。佐藤さんは、震災前の学校や子どもらの写真を紹介し、「ここには街があり、命があり、子どもたちが走り回っていた。『あの大川小』でなかった日々を忘れたくない」などと述べた。

防災記者らは天井に津波の痕跡が残る教室や、コンクリート製の支柱が倒された通路などを見学。佐藤さんによると、児童たちは約50分間校庭に待機し、学校近くの新北上大橋の方向に1分ほど歩いたところで、津波に襲われたという。

防災記者らは、児童の避難経路をたどった。「津波が来たときにどう行動するかが十分に決まっていなかったから、みんなパニックになった」と佐藤さん。避難訓練などの重要性を説き、「自分や大切な人を登場人物にしてやるべきことを考えてほしい」と訴えた。

避難場所を決めておく

佐藤さんは「災害は止められないが、あらかじめ備えることで多くの命を守れる」と話していた。避難場所を決めておくといった取り組みが、迅速な判断や身を守る行動につながると実感した。先日、学校で避難訓練の大切さを全校生徒に話す機会があった。周りの人に災害に備えることの大事さを伝えていきたい。

橋彩葵さん 14歳

(仙台市七北田中2年 高)



自分ごととして捉える

昨年引き続き、大川小を視察して佐藤さんの話を聞き、伝承の在り方を自分なりに考えた。大川小には他の震災遺構で見られる看板や説明書きがあまりない。その状態で遺構を目の前にして話を聞くと、頭の中で自分が災害時の大川小に居るように置き換えられ、災害と防災を自分ごととして捉えられる気がした。(仙台青陵中等教育学校5年)

高橋杏奈さん 17歳



日常の備え深く考える

佐藤さんは、震災前の学校や暮らしに焦点を当てて話をしていた。語り部は震災時や震災後を語る印象があったので、新鮮で胸に響いた。「訓練はどこか人ごとになりがちだが、訓練には本番があると意識することで、本番でより良い対応ができる」との言葉も印象に残った。日常の備えについて深く考えさせられた。(仙台育英高1年 大橋乃子さん 16歳)

乃子さん 16歳



後悔ないように取り組む

地震発生から50分、児童たちは避難を開始し、1分後に川を遡上した津波にのみこまれてしまった。佐藤さんは、守ることが可能だった命を守ることができなかった事実を心にとどめ続ける必要があると話していた。誰一人として後悔しなくて済むように、日常的に防災に取り組める環境や社会をつくりたいと思った。(仙台市五橋中3年 山口岳人さん 14歳)

山口岳人さん 14歳



教訓学び将来の希望に

大川小を視察して、何が起きたのか知ることが大切だと改めて感じた。過去の災害での行動が良かったなら、参考にすればいい。失敗したなら教訓を学び、将来の備えと希望に変えればいい。震災時、事前に防災対策をしていた人は、逃げられたそうだ。普段から、災害時に自分がどう行動すべきか考えていきたい。(聖ウルスラ学院英智高3年 瀬川幸佳さん 18歳)

瀬川幸佳さん 18歳

